

4 成果と課題

(1) 成果

○参加者満足度

【事前キャンプ】満足：21人（88%） やや満足：3人（12%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）
【本キャンプ】満足：22人（100%） やや満足：0人（0%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）
【事後キャンプ】満足：23人（100%） やや満足：0人（0%） やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）

○参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ①参加者アンケートで、「自分たちで考えて決める活動が楽しかった。」「グループのレクリエーションが楽しかった。」等の感想が見られたことから、グループで考え話し合う活動が、参加者の挑戦意欲の向上やグループへの所属感につながったと考える。
- ②参加者の様子やアンケート記述で「登頂できてよかった。」「仲間と協力して登りきることができた。」とあることから、本キャンプで実施できなかった登山で達成感やグループでの連帯感を感じることができたと考えられる。
- ③本キャンプの1カ月後の保護者アンケートで、「家の手伝いを自分からするようになった。」「（自分から）料理してみよう。」という感想から、本キャンプのプログラムが参加者の自発的な行動につながるきっかけの一助になったと考える。
- ④閉会式で決意表明を取り入れたが、どの参加者もすぐに自身の感じたことを自身の言葉で発表することができた。そのことから、参加者は本キャンプで学んだことを自分なりにふりかえり、これからの生活に生かしていこうとする意欲につながっていると考えられる。

○本キャンプの趣旨に対する成果

(1) 7泊8日の長期自然体験活動において、協働的な体験プログラム（野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等）を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。

- ①ステージを『基礎的知識や技能の獲得→活用』と設定したことで、グループ内で手助けが必要な場面に友達を支援、協力して活動する姿が見られた。
- ②「サード」ステージで実施したグループキャンプタイムでは、活動内容や野外炊事のメニューを決める際に、意欲的に話し合いに参加し、グループの友達と合意形成を図りながらお互いが納得のいく形へと導く姿が見られた。
- ③事前にボランティア研修キャンプを実施し、青木委員による「ふりかえりの仕方」についての講義・演習を行ったことにより、ボランティアが中心となって関わった毎日の「ふりかえり」が充実したものとなった。
- ④今年度は、本キャンプの1カ月後に事後キャンプを実施した。本キャンプが日程短縮のため、登山が未実施となったが事後キャンプに実施することができ、弾力的なプログラム調整が可能となった。また、参加者の1カ月の変容を直接見取ることができた。

(2) 課題

○プログラムについて

- ①レクリエーションの内容検討や野外炊事で作る料理の手順や役割分担をチームミーティングで話し合うことで、グループの話し合いが参加者にとってより「必要感」があるものにする。
- ②参加者がキャンプを通し、自身の成長や変容がわかるようなプログラムや掲示の開発をすることも必要だと考えられる。ベースとなる研修室にふりかえりカードは掲示したが、参加者が一目で成長を把握できるような掲示の方法とふりかえりカードの工夫が必要だと考える。
- ③「多様性を認め合える意識の醸成」という本キャンプの趣旨から、多様性を認め合うといったことにつながるプログラムとその効果を事前に検討し、精選しながら取り入れていくことが必要となる。

○参加者の安全確保・健康維持について

- ①熱中症対策
 - ・日中の活動時における、熱中症対策に重点を置いた休憩の取り方についてボランティアと十分に確認しながら対応していく必要がある。そのためにも、空調のきいた部屋を確保し、休憩時にはその部屋で休むことが可能な体制をつくる。
 - ・夜間における屋外のテント泊中の熱中症対策として、テント設営する時間や就寝時間の配慮と熱中症対策のグッズなどの用意をする。
 - ・感染症予防も考えながら、屋外での活動時は人と十分な距離が取れる活動時はマスクを外すよう推奨していく。
- ②感染症対策
 - ・要項、案内などでキャンプ参加までに感染症予防において注意する点を明記し、キャンプ前の体調管理を家庭に協力してもらうことも必要。
 - ・キャンプ参加前から十分な健康観察を行う。また、場合によっては参加前の抗原検査などを行うことで、スクリーニングとなり、感染者がいない状態でキャンプを始めることが感染症予防として考えられる。
 - ・感染症対策として、野外炊事や入浴など参加者に感染症予防ルールの徹底を事前に職員・ボランティアで共有する。
 - ・感染症が発生した場合、参加者の移動や活動の制限を十分に検討しておく必要がある。
- ③人員配置
 - ・感染症発生時、職員が対応にあたることから救護専門のスタッフの配置も考えられる。
 - ・グループごとの登山時には、グループごとに緊急時に適切な対応が取れるような職員の配置が必要となる。
 - ・今回は各班にボランティアを2名ずつ配置したが、1名にする、もしくはリーダー、サブリーダーというように役割を明確にし、参加者に対応することが必要である。